

國學院大學學術情報リポジトリ

中間成果公開シンポジウム「モノと心に学ぶ伝統の
知恵と実践」基調講演
モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 林継 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001972

中間成果公開シンポジウム「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」基調講演

モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践

杉山林 継

私は今年七十歳になりますので、ついに大学も定年になります。実は、専任教員になってからの年数は短いのですが、他の研究機関へも出てはいません。渋谷の街へ入ってきたのは、まだ高校生だった昭和三十一年で、國學院で一ヶ月ほど神道講習を受けました。当初は、國學院大學に入学するかどうかわかりませんでした。やはり縁があったんでしようね。その後、昭和三十三年四月に國學院へ入学しました。昭和三十三年と言うと一九五八年ですから……すでにこの大學に来てから五十年、ということになります。その間、いろんな時期があり、給料が無い時期もあったりして……。それでも、なんとか生きてきました。

いま私たちは、「常磐松」という場所にいるのですが、渋谷校舎の中でも隣は「若木町」という名で呼ばれていました。現在は全てが渋谷区東の四丁目ですが、私はそんな呼び方をしていた時代から、ある意味でここに住みついてきた、といっているでしょう。五十年も居ると、本当に色々なものを見てきています。会場にも、私と年齢が近い方が何人かお見えのようです。そういうえば、三橋健先生も私の同級生ですね。半世紀というと、確かに長いものでしたね。

今日は、その間に色々と見聞きした事を織り交ぜつつ、平成十九年度に選定された文部科学省オープンリサーチセンター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」の研究活動に、どういった背景があるのか、そしてこれからどう実践していくのか、といったことをお話ししてみようと思います。

校史資料収集の頃

本プロジェクトで展開している三つのグループは、一つは考古学、もう一つは民俗・祭礼関係、そしてもう一つが國學院大學の歴史を中心に研究していることとするものです。最近では、他の大學でも盛んになっているようですが、次第に三つ目の研究内容を考えるようになってきました。自分達の大學の歴史を考えた上で、今から何をやっていかなければならないのだろう、と。そういう発想から、学校の歴史、即ち校史を研究するようになってきたのです。校史は、我が大學でも前から校史編纂室の活動や、特定の先生方の研究を見直していこうとする個々の動きもありましたが、大學規模の研究プランが具体化したのは本プロジェクトが始まってからのことです。事業開始から現在までの二年半くらいの間では、資料の分量が多いためそう簡単にはいかず、大學の歴史も百二十年を越して百三十年に迫ろうという中で、古い時期の出来事にはわからなくなってしまうものもある。そういった状態の中で、研究を進めているわけです。

ご存じの通り、この大學は皇典講究所から始まりました。皇典講究所が設立されたのは、明治の「散切り頭を叩いてみれば、文明開化の音がする」という所謂欧化政策、その勢いが過ぎていっているのではないかと明治の十年代に少し見直しが入ってきた段階です。やはり日本の文化を見直そう、と作られたのが皇典講究所であり、それを基にした大學が國學院大學です。

こうして大学ができましたが、今度は昭和二十年の終戦の時には存続が危ぶまれた時期もありました。しかし、私立大学であったことと、その当時の先人達がなんとか生き残りを考えて下さったことで大学は存続しました。本学は、大学令大学、旧制大学の一つです。柳田国男先生や、折口信夫先生、そして石川岩吉先生をはじめとする先生方は、どうしたら占領下で本学が生きていけるかということを考えた上で、当時の方針を決めていったそうです。

そして今度は、日本が昭和二十七年に独立し、その独立した国の中でどうしていくかということを考えていくことになります。ところが、なかなかこれが難しい。そして、色々な構想を考えた上で作り出していったのが、日本文化研究所という研究機関でした。当初は、日本文化研究所を財団法人として作ってこうとしたのですが、資金が無く、また資金が集まらないため、法人化までは辿り着けなかった。これが昭和三十年から三十一年のことです。もともと國學院大學は、ずっと古い段階から常にお金が無い大学です。たようでした、戦後も給料がまともに出せず、給料を半分ずつ出そうとか、少ずつ出そうとか、そういう状態の時もあった。それでも、今日まで生き残ってきたことは事実です。

そんな時期でしたが、やはり日本文化の基礎的な研究をやらなければいけない、という思いがありました。この中には、それまでの資料をちゃんとまとめていく作業、或いは戦後世界の中で失われていく日本文化の実態調査などがある。そういうものも含めてやっていかねばならない、という動きがあったのが日本文化研究所設立のころの話です。日本文化研究所は、若手の研究員を入れて、年配の研究者がリーダーとなってやっていく、というやり方を始めた研究組織です。現在は、戦後六十年間継続したこの方式をもとに、日本文化研究所を研究開発推進機構という組織体に進化させました。

このように何度かの転機がありました。その転機毎にこのままではいけない、次に何かをしなければいけない、と時々の人達が考えてきたということとは、長い時間から見ると、確かに休みの無い努力だったろうと思います。

そして、そういった幾つかの時代に思いを馳せてみると、やはり今日も新しい時代として何が出来るか、という事を考えていかなければならないわけです。そうすると、この大学の歴史は非常に大事なテーマですが、なかなかそれを研究するだけのデータが取り揃えられていない、まだまだ足りない状態であると言わない訳にはいきません。

たまたま私は、河野省三先生の蔵書を頂戴してきた時の担当でした。勿論先生が亡くなられた後ですが、何度も何度も埼玉の騎西の先生のお宅へ行って、蔵書などを頂戴してきました。初めはトラックで行き、そのうちに小さなライトバンで何度かお邪魔して頂戴してきましたのです。中には、開できない物もあるかもしれないけれど、いずれ必要になるといって、御遺族の方から御理解を頂いた上で、最終的には先生の書簡や日記など、出来るだけの物を頂戴してきました。河野先生の資料をあまり散らせたくないと思っていましたし、本学で学長をされたこともあって、なんとか資料をまとめて大学に収蔵を、と願ったことでした。

それから、大場磐雄先生のお宅からも資料を運ばせて頂きました。大場先生は、集めた資料については散らしたくない、という御遺志が生前からありました。遺言書にも、「後の者に資料等を託す」といったことが書き付けられています。買った本は、どうなっても仕方が無い。しかし、自分の集めた資料はコレクションではないが、データとしてなんとか後に活用して欲しい。そういった気持ちから、資料等を散らさないよう強く言われていたんですね。これらの資料には、写真、図面、拓本や、送られてきた手紙などもあります。絵葉書は、送り主が何らかの理由で考古資料関係の絵柄を選んで送ってきている。先生は、その裏に鏡なら鏡が写っていれば、その「地方」の「鏡」関係データを収納する袋や箱に保管し、必要に応じて資料として活用する、という方法を採られていました。

このような資料は、いずれどこかに収蔵展示ができれば良いと思います。

大場先生は、ご自分で箱へ別けて資料を分類されていました。撮ってきた写真も、大場先生の時代はガラス乾板が多く、それを非常に大事にされて、一枚ずつメモを取って整理されていました。フィルムになってからの写真もかなりの数になりますが、それらを含めた全てが大学へ収められています。

頂戴してきた図書やその他の物は、順次整理して少しずつ公開出来るようにしています。現在推進中の計画はオープンリサーチセンター整備事業ですが、それ以前にCOEという文部省の事業があったり、そのもう一段階前から補助金事業として学術フロントティア事業があったり、そういう中で研究を重ねながら、諸先生方の資料を整理してきました。とても一日二日で出来るものではない、一年でも出来るものではない作業です。

更に私が関係したのものとしては、非常に良い機会に恵まれて、宮地直一先生の資料も頂いてきました。たまたま大学に私がいたため、当時の阿部美哉学長に呼び出されて行ってみたところ、宮地直一先生資料をどうするか、という話があり、それは是非頂戴したいということで、宮地先生のお宅のある世田谷の蔵の中身を、基本的には全部頂いてきました。

私はいつも、ほとんど全ての物を頂くという、頂き方をしていますが、その中でやはり気を付けなければいけないのは、「個人資料」そのものの性格です。本当は一切適切、全ての物を頂戴して研究対象にしたいところではありますが、これには問題があります。下さる側も、こちら側を信用して下さっている。ですから、どの部分はお返しするほうが良いだろうか、という事は私は常に考えています。一通り頂戴してきたものは、私自身の責任で目を通して、非常に個人的な物は返却するようにしているわけです。

たとえば、河野省三先生の家は代々続く玉敷神社の神主家であるため、河野先生の所で頂戴してきた品々の中には、玉敷神社の関連物も時に混ざっていました。これはやはり、玉敷神社にお返しして、そこで保存してもらった方が良いでしょう。そう判断できる物は、私が後からお返しに上がっています。また、河野先生は國學院大学の先生としても非常に重要な先生で、その先生の日記

帳も研究対象になってくるため、これについては頂戴していますが、先生のご家族や、それに近い方の物についてはお返ししています。或いは、大学で頂戴してきた物の中でも、しばらくの間は公表しない方が良く、と判断される物については資料の取り扱いに関して気を付けてきました。特に書簡などについては、相手方の信用の下に寄贈して頂いている、ということを大事にしなければいけないのです。

これ以外にも、何度か資料を頂戴するところに立ち会ってきましたが、基本的には、大学関係者の物を大学が頂戴するわけですから、いずれは全て公開する事になると思います。しかし、いずれ全てを公開する時に、資料等を下さった先生方の不名誉な使い方をされるようなものについては気を付ける必要があるでしょう。実際には想定しにくいのですが、やはり扱い方によっては非難の材料として使われる可能性がある資料も存在します。その事について、私は常識的に判断して公表出来るものでなければならぬと思う一方、時に負の可能性があれば、これは気を付けて処理しなければいけない、と気を付けながら資料を頂戴しています。

今日の研究と「個人資料」の活用

ところで、國學院大学には、文学部・神道文化学部・法学部・経済学部があり、最近人間開発学部も開設されましたが、総じて文化系の学部を主体としています。文化系の学部であると、やはり、これまで蓄積された資料が大事なものとなってきます。

個人的なことになりますが、私は大場磐雄先生が晩年になられてからの弟子でした。私が昭和三十三年に入学した時は、既に六十歳になる頃で、その後私が大学院の二年を終わってから先生の助手を六年間務めました。六年目の最後の年は、大場先生の定年の年です。これが昭和四十五年のことで、昭和五十年に大場先生は亡くなりました。大場先生の晩年にお仕えした私は、

各地の調査・研究に同伴しました。大場先生は、あちこちの弟子筋に連絡をとって全国的に歩かれましたが、私が関係した考古学関係の調査は、当時先生の関係された仕事の半分くらいではないかと思えます。その中で先生は、今このプロジェクトに携わる若い研究者たちが一生懸命やっている東北地方の縄文時代などの問題も扱っていましたし、伊豆半島における祭祀遺跡も扱っていました。そして、出雲も古いころから扱っていました。

大場磐雄先生は銅鐸関係の著書も書かれています。出雲の銅鐸は先生がお亡くなりになるまでに発見が間に合いませんでした。先生は、銅鐸とカモ氏を結び付けて本を書かれましたから、ご存命ならば賀茂岩倉遺跡の発見を喜ばれたでしょうね。もっとも、銅鐸が三十九個体出土した地点を加茂岩倉遺跡と呼んではいますが、本当に「加茂」なのかどうかは微妙なところ。広い範囲で見れば確かに「加茂」に当たるのですが、細かく見れば微妙なところなのです。それにしても、それ以前に発見された荒神谷遺跡、そして加茂岩倉遺跡、その他を含めると出雲地方が日本一の銅鐸、或いは銅剣の出土地域となりました。

『古事記』の中で出雲神話が占める部分が非常に大きいように、それ以前の出雲は、神話の世界では日本一でした。ところが、これを考古学的に証明しようとしても何もなかった。神話世界だけの話でした。しかし、大場先生が亡くなられた後になって銅剣・銅鐸の大きな発見があり、青銅器時代の出雲の位置付けが全く変わってきました。

それからもう一つ。御存じの通り、杵築大社、いわゆる出雲大社には古代から巨大な建造物があっただろう、ということは早くから言われていました。本居宣長の時から、すでに盛んに言われてきたわけですが、それにしても、そのまま残っていた大きな柱が出土した、という事実は大変な問題です。あれは鎌倉時代のものだ、ということになりましたら、地元では平安時代のものではないのか、とちよつとがっかりしたとか、少しトーンダウンした時もありましたが、私からすると、鎌倉時代になってからもあれくらいの規

模で建てていた、ということが大きな問題だと考えます。以前は、鎌倉時代には平安時代の半分くらいの社殿しか造れなかった、残された絵図から考えても半分程度の大きさの建物しか造れなかった、という言葉方をしてきました。それが、鎌倉時代に建てられていたわけです。これは、鎌倉幕府がまだ力を持っていた時、そして荘園制もまだまだ機能していた時、両者の折り合いが上手くついたがためにできた最後の造営でした。その後、鎌倉幕府は元寇に外から攻められて防備をしなければいけない、という状態の中で力を無くしていきます。その直前のものとして、あれだけの規模の出雲大社の造営ができた、ということは大変大きな問題なのです。

具体的にみると、あの柱は、直径一・二メートルから一・三メートル程度の柱を三本束ねて一本の柱にしていますから、直径が三メートルくらいになる。直径約三メートルの柱を九本も建てると、どれほどの高さになるか、建築家さんたちは様々な仮説を述べています。例えば、五重塔や七重塔の礎石、すなわち土台石が残っていると柱の直径がわかります。逆に、この柱の規模でしたら五重塔ではなく七重塔相当である、などと様々な経験や分析から指摘する方もいるわけです。

このような問題については色々なシンポジウムをやりましたが、出雲大社の大柱はいつまで遡るのか、という質問が多かったと思います。意見は色々あるでしょうが、私は古代を馬鹿にはできない、と考えています。古代には、とてもそのような力はなかった、などと安易に考えてはいけません。平安時代に存在した事はわかっているし、奈良時代も同じ律令の世界でいいだろう、と。もちろん、それ以前はどうかと言われると、なかなかそれは難しいですね。しかし、今申し上げたように、出雲の神話世界のあり方は考古学的資料を目の前にして、ようやく考えていけるような状態になったわけです。出雲神話の成立や、出雲神話があればだけの内容を持っている事の意味に対する認識は、大場先生がご存命の時代と、我々の時代では少しずつ変わってきているのです。

ところで、大きく話はかわりますが、この三十年から四十年の間に、変化して見られなくなってきた物があります。例えば、皆さんがちよつと田舎へ行っても、草葺屋根の家なんていうのは、ほとんど見られないでしょう。しかし、戦後の昭和三十年代や四十年代くらいまでは、奈良県あたりに、非常に綺麗な屋根が沢山見られたのです。他の地方へ行っても、茅葺屋根の綺麗なものが沢山ありました。文化財の建物は別ですが、もう今は殆ど見られない。茅葺職人はいない、或いは茅山が無い、という状態です。神社などでは、檜皮葺は残っています。しかし、この檜皮葺も特殊な建物になつてしまっています。このように、ついこの間まであったものが、我々の身近に見えなくなってきた。こういったことも、私たちが改めて考えていかなければならない問題です。

大場先生は、多くの写真資料を残しておられました。また、小川直之先生が沖繩で開いたシンポジウムのテーマにあるように、折口信夫先生も沖繩で写真を撮っています。限定された時間の中で得られた資料を、我々は改めてどう見るのか、ということに関わってきますが、それも当時の資料があつて初めて考えていくことができるのです。これは、大場先生の資料、或いは宮地先生の資料、そして河野先生の資料などを見ながら、研究・分析を進めていくこととなります。

私の先輩には、佐倉の国立歴史民俗博物館の民俗分野へ行った坪井洋文先生がおります。随分個人的なお付き合いをさせて頂き、ご迷惑をかけたこともあつたでしょうが、そんな中で彼の民俗調査の現場について行った事があります。寒い公民館の十ワット、二十ワットの薄暗い電球の下で、担当の方が出して下さった資料を撮影する、というような事もやりました。その坪井さんは、千葉の天面にある小さな集落へ三十年以上通っています。通つて、そしてその集落がどう変化しているかを見ています。三十年も行くと、世帯も交代していきますから、そういう世界を定点観測する。同じ場所で継

続して写真を撮っていたら、どう変化が見えるか、といったことに似た仕事をやっているのです。それを見てみると、坪井さんの自身の頭の中、すなわち見る方も変化していったと思いますが、見られる方も変化していく。坪井さんは、そんな関係を理論化しながら研究を続けていきました。私は、変化していく事を観察すること、その大切さに気を付けていかなければいけないと思います。かつて、坪井さんに対して、なぜ民俗学という学問は時間を見ないのだ、と何度も言ったことがありましたが、実は民俗学も時間を見ていないわけではないのですね。

私は歴史を専門としていますから、変化することばかり気にしています。何かしら変わっているはずだ、と見ているわけです。また、私は神道文化学部の教授をしていますので、神道のほうですと変わらなところを見ていこうとする。それもまた一つの見方です。しかし、私などは歴史のほうの分野で、なにか変わっているはずだ、少し経てば変わっているはずだ、二つの物があればどこか違うはずだ、どっちが古いか、どっちが新しいか……と一々そんなところを見えてきました。ですから坪井さんとは、なぜ民俗は十年一日、百年一日といった雰囲気の研究しているのか、と酒を酌み交わしながら随分議論したものです。しかし、一ヶ所で何十年もかけて調査していく、というようなやり方も、ある意味では大変な事だな、という気がしています。

先ほど、私は國學院大學に五十年もいると言いました。一人の人間ですと、なんとか五十年くらいの変化なら見届けることができます。しかし、例えば、ここがどういう土地であつたか、といえれば元々は大学の土地ではありません。そもそもは李王家のお屋敷で、それ以前は我々の知らない時代の話です。私を知ってからでも、まだ李王家の土地があり、それを大学で購入して日本文化研究所にしていくなわけです。その裏にあつた大きな井戸の水は、とても冷たくて、量も多かった。当時としては、非常に貴重な夏の飲料水でした。いい庭園だったな、と今も思い出します。

また、根津嘉一郎さんから頂戴した建物は、なかなか変わった洋館だったのですが、若木町で図書館として利用していたものを、道を隔てた常磐松に移築して学生ホールにしていた時もありました。ほかに、木造二階建ての建物もあり、若木町では戦時中の焼夷弾で三階が焼かれた建物もずっと使用していました。國學院大學は、大正十二年に飯田橋の校舎を売り払って渋谷に引越してきましたが、その途端に関東大震災があつて、まだコンクリートが乾いていなかった建物に突っつい棒をしたそうです。私は、柳田国男先生の授業などをそこで聴講しました。

私が大学生なつた頃には、正面の門を入つて突き抜けると、小遣部屋と呼ばれていた用務員さんの部屋がありました。そこの大釜で沸かしたお湯をやかんにもらつて研究室へ持つていきます。当時の大学の先生は、助手がちゃんと教室までお茶を持つて行つて、そのお茶を一杯飲んでから話し始める。そういう時代の話です。ところが、何人か集まつて、互いに教務課はどつちにあつた、学生課はどつちにあつた、などと話をしてるうちに、それは記憶違いじゃないのか、といった話にもなつてきます。このように、今は残っていないものに対する記憶は、確かなようでいて、また臆げでもありません。

研究資料に関して言えば、ある資料について直接先生の教えを受けた弟子から、孫弟子、曾孫弟子と世代が降つていくと、見る方の見方も変わつていきます。しかし、見られる対象である資料が、そういう時代から残つていている場合もある。そうすると、物事に対する見方の変化まで観察することができるようになるわけです。また、大場先生の資料なり、宮地先生の資料なりというものは、先生が観察したことを、我々も見ることが出来るという点で非常に大切なのです。

大場先生は、実は折口先生の弟子の一人であり、これは和歌のほうの弟子といつても良いだろうと思いますが、それにしても折口先生の影響はかなり受けています。或いは、柳田先生の影響も受けてはいます。誰もが様々な影響を受けながら生きてるのは当然ですが、その結果、大場先生の学問

の中には民俗学が入つたり、宮地先生の神道的な見方が入つたりしています。それがあつて初めて、所謂「神道考古学」という学問になつていったわけですね。そう考えると、やはり大場先生の資料の中には、色々な視点から収集された資料が相当入つています。これも、私は非常に大事なことだと思つておりますし、使えるな、と考えています。

残された絵画や写真が紐解く新研究

また、現在本プロジェクトでは、第二グループの中で祭祀・祭礼を中心に扱つていますが、こういう研究にも、古い写真類や絵画類などが大きな貢献を果たすことがあります。実は一昨日、私は加賀白山の檜新宮に登つてきました。わずか標高千五百メートル程度のところですが、現在は途中まで林道があり、四輪駆動の車でぎりぎりまで行つてから歩きました。それでも十時から歩き始めて、再び車の所に降りてきたのが五時ですから、三時間ほど登りにかかっています。そこは、「加賀禪定道」と呼ばれるところで、現在は国有林になつていますが、地元の人たちが年間三千円ずつ払つて小さなお宮を再建し、年に一回くらい草刈りをして、お祭っています。

私が、この加賀禪定道へ行つてみたいと思つたのは、所謂「白山曼荼羅」の表現に注目しているからです。その白山曼荼羅の絵を見ると、大きな檜の木や、小さな三つの社殿が描かれているのですが、どうも拝んでいる人達は祠の方を向いておらず、木の方を向いているようです。白山市の教育委員会会で一生懸命でやっている小坂大さんという方に、この木がまだあるのか伺つてみますと、まだそのままあります、とのこと。なんとか行つてみたいと、と希望していましたところ、一昨日連れて行つて頂くことができました。そして、行つてみて驚きました。檜の木が、曼荼羅に描かれた通りに立っているのです。樹齢約八百年の木ですので、二百年か二五十年前からそのままの可能性ががあります。

更に、その脇に白く曲がった木がありました。絵で見た時は、これは何かの枯れ木かな、と。しかし、そちらの方を向いている人も描かれている。これは一体なんなのだろうか、これは木の信仰として扱えるのではないか、ということが気になっていたので。行ってみましたら、そこに白樺の大木があるのです。普通、白樺といったら何十年も何百年もたないと思うのですが、多分あの木は、数百年ものだと思えます。それが横になっている。案内してくれた小坂さんは、この木があるんですよ、と事前に仰っていましたが行ってみるまでは半信半疑でした。ところが、これも行ってみたらあるのです。描かれた絵のままになっている。檜の木は、枯れた木もそばにありますが、枯れ木も、今生きている木も、二抱え、三抱えくらいある檜で、しかもその下が大岩なのです。その大岩の上に檜が乗っかって伸びている。まさに、曼荼羅に描かれたそのままの姿なのです。

一方、三つあった社殿は失われ、今は新しく昭和五十七年に造られたものが一つだけあります。そこには礎石が残っていますので、肉眼観察だけではなく精密に調査したいと考えました。ところが、行くのに私はのろろ行ったため三時間半かかってしまいました。早い人でも、恐らく二時間以上かかるでしょう。そこで小坂さんに「ここでは水は…」と伺うと、「近くに水場がありますから案内します。オツボの水と言って、泰澄大師が腰かけた石があつて、そこから年中水が出ています。すぐ傍ですから案内しましょう。」と言うのです。すぐ傍というので十分かそこらかと思つたら、谷間を三十分以上降っていくとのこと。かなり急なところを下りて行きますと、確かに水が渾々と流れ出ていました。これがオツボの水と言って、曼荼羅にも描かれている場所なのです。本当は、そちらから上がってくるのが正しいルートだったのですが、我々はちよつと脇から楽な方を行ったため、谷を降りることになったのでした。

しかし、そういうものが絵に描かれたまま残っているという事実には、私は感激しました。ぐずぐずしているうちにガスがかかってきたので帰りを急ぎ

ましたが、案内してくれた小坂さんによれば、色々見たいとか、行こうとか言う人はいても、実際に奥まで行く人はいなかっただけです。私は何とかついて見えてきましたが、非常に印象的な経験ができたことに満足でしたし、そんな私の感動を小坂さんも喜んでくれたようです。

絵画資料と、実際の現場とが一致するというのは、大変興味深いことです。ご存じの通り、この曼荼羅は絵解きですから、山に行けない人にも説明しながら、信仰上の事を説いているわけです。たまたま私は現地に一昨日行ってきましたけれども、絵画資料や写真資料も非常に有用であり、大事にすべきであると思っています。

このような例を含めて、先人の残した資料は是非大事にしていくべきでしょう。しかし、先人の資料のことばかり言っていると、君たちは新しいこと何もしないのか、ということになってしまいかねません。もちろん、私たちは現代の研究も一生懸命に見ていますから、加えて先輩方のデータをプラスして見ることができる点で有利なのです。

特に第一グループでは、私などの考えとは全く違う新しい見方を、若い研究者達が色々試行錯誤しながら行っています。新しい研究機器も身近で使えるようになってきました。例えばGPSを用いると、今どこにいるか、という地点をほぼ正確に確認できるわけです。そういう物も我々の時代にはありませんでした。かつての山中の調査では、せいぜい我々がいるのはおよそここだろう、この谷筋からいこうとここだろう、とスケッチしてくる程度でしたが、今やピンポイントで地点を測位することができます。そして更に、色々な科学的なデータも沢山できてきました。それらを上手く使いながら、どう組み立てていったらいいか、ということは今、若い研究者達は考えてくれている。私たちは、新しい方法を常に一步一步考えていかなければいけないわけですから、それは是非進めてもらいたいと思っています。

このような研究方法の進捗は、昔から常に試みられてきました。例えば、

民俗学をやっていた先生方は、早くから写真撮影を非常に大事にされていた。また、関西の神社へ行って色々見せてもらっていたところ、暗い遷座祭などの場面を撮影したガラス乾板に出会って驚いたこともあります。そもそもガラス乾板は、感度が良くない物が多かったのです。撮影も、大場先生がやっていた方法ではシャッターなど必要ありません。レンズの前に被せた海苔玉の瓶詰の蓋などをパツと外し、いいかな、という時にパツと蓋をしてシャッター代わりにしていました。そういう状態ですから、少し薄暗くなってくる、何分間も蓋を開けっ放しにして、じっとしているわけです。何分かの間に、誰かがちよろちよろっと入ってくると、「誰だ！」まだ写真撮影中だ！」と怒られます。一見、撮っているのか、撮って無いかわからない状態でした。そのようなガラス乾板なのですが、関西の大きなお宮の夜の祭りの写真などが撮られているのです。マグネシウムを焚くのはご存じかと思いますが、そういうことがやれない状況で撮影している写真があるのです。あれはどうやって撮影したのかな、と思うのですが、そういう祭りの写真も私は非常に大事だと思います。私が見せてもらったものは、春日大社や賀茂神社などのガラス乾板でした。國學院大學でなんとか処理してくれないか、と言われましたが、ちよつと手に負えない数が残されています。しかし、まだ全国にはそういうものが多数あるでしょう。それは、ほとんど戦前の写真です。私は、何とかしてこの大学の中にある資料だけではなく、利用させて頂ける範囲内の関係者のところからは資料を集め、國學院を発信基地にしていきかけた。しかし、私ももう定年ですから、今度は若い研究者の中で、そういう考えを持つてくれる人がいるとりたいと思っています。そうすると、國學院大學を中心とした資料センターとして、今度は各地に情報を発信していただけるという気がします。

実際に、このプロジェクトでも各地の大学、或いは国内外の研究機関と提携しており、様々な契約を結んで、お互いに一緒に研究しようというやりかたをしています。一人でできることと、何人が集まってできることは違って

きます。輪が広がれば広がるほど面倒も増えるかもしれませんが、しかし、違った見方でやることもできるわけです。私はまだまだそういった実質的な活動が足りない、という気がしています。うちの大学は、科学や物理でノーベル賞を貰えるようなメンバを育てているわけではないですから、ずっと長い間続けてきた文化系の学問の中で日本一のセンターとして動ける、そういう方向性を考えると、神道とか或いは史学とか、文学とか民俗などの世界の中でやっていくのが最も着実にできると思っています。私たちは、これをやっつけなければいけません。

そして、うちの大学の中だけでは駄目なのです。大学の中だけではなく、そこに関係してくるようなところ、例えば、本校の卒業生の中には学校の教員をやっている方々も沢山おり、言うまでもなく神社界にはかなり大勢の卒業生がいます。そういう中で進めていくことができる仕事が、きっとあるはずなのです。

そしてまた、それぞれの資料を提供してもらうだけではなく、それを國學院で今日的研究のデータとして活用するわけです。実際、ガラス乾板そのものだけでは、ある意味どうにもなりません。ガラス乾板を写真屋に行って焼いてもらおうとしても嫌がられるだけです。ですから、私たちの手で、このガラス乾板を研究者たちが利用できるようにしなければなりません。これを國學院の中でちゃんと利用できるようデータ化することで、初めて学術資料として使えるようになっていくわけです。そういうことを、私たちは考えていかなければいけないだろうと思っています。

あちこちの大学の中でも、そういうものに興味を持っている研究者もいるのですが、大きな大学は大きな大学なりに、なかなかそこに特化出来ないというか、事情が難しいようです。しかし本学のような大学は、学生数が八千人から一万人の中規模大学ですから、比較的柔軟に方針を立てて、こういった資料を活用していくことができるであろうと考えています。

日本列島一万年の精神史研究センターとして

お集まりの皆さんには、すでに伝統文化リサーチセンター資料館の展示室をご覧頂いているかと思いますが、マツリに用いたであろう考古資料や、神社祭祀に関する資料を多数展示しています。長い時間の流れを通観する主旨ですので、片方の展示室は考古学が中心となっており、もう片方は神社資料や民俗資料など、現代の祭りに至る所蔵品をご覧頂いているわけです。國學院大學は、それこそ二千年来、縄文時代を含めると一万年以上遡る古い時代から、この二十一世紀までを繋げた日本列島の文化を研究することができる大学だ、という風に考えています。

皆様ご存じの通り、古く遡れば遡るだけ、宗教がかった世界に入っていきます。宗教がかってくると言い方は少し変かもしれませんが、歌を歌うにしても、今だからこそカラオケなどへ行行って自分が好きな曲を自由に楽しむことができるわけです。或いは芸能でも、単純に楽しむためにそれを見に行くことができるわけです。しかし、それが古代、奈良時代くらいまで遡ると、歌だろーと何だろーと、今とは少し違った考え方で捉えられていたのですね。そういったことは、『万葉集』などを見て頂ければ分かると思います。そんな世界が、古墳時代、弥生時代、或いは縄文時代へと遡っていくと、これはますます宗教がかってくるに違いありません。例えば、東北地方のある縄文時代集落では、ムラの中心に三十メートルから四十メートルほどの規模を持つ大きな長屋状の建物がありました。あれは集会場で、皆が酒を飲んで楽しみながら踊りを踊っていた、というような評価をされますが、単にそれだけなのでしょう。そこでは、何かのマツリをやったり、宗教的な儀礼をしたりしている。そう考えることもできるのです。古くなればなるほど、今の私たちには想像もつかないほど、人間と神様との世界は近づいていたのです。

こう考えると、やはりこの國學院大學は、先人達の研究に学びながら、そして考古学や民俗学などの方法論を使いながら、二千年、五千年、或いは一万年の流れを掴む事のできる大学である。そして、それを上手に掴んで、今度は全国に発信する事のできる場所なのだと思います。

これは、相手を日本国内に限ったことではありません。以前から日本文化研究所には、ドイツやアメリカなどから、研究者が多数訪れてきていました。彼らはみな、研究所を日本文化研究のメッカとして集まってくれていたのです。世界に日本文化の流れを発信できる拠点を、ここで確固たるものにしていかねばなりません。それは、私たちの務めであると思っています。この五年間のプロジェクトの中で、これを一つの方法論として成り立たせていくことを、私は大きな課題にしたいと思っています。

今、伝統文化リサーチセンターは、三本の柱で具体的な研究を進めています。一つは考古学を中心に、遺跡・遺物などのモノを見ながら、それをどう考えるか、或いは当時の人達がどう考えていたか、ということを我々の頭の中で復元して、それを組み立てていくわけです。

更に、祭礼等の研究も行っています。神饌の中には、花の神饌もあります。作った花が、神様を喜ばせるのです。喜んでもらえるものとしての花が、今の社会では少なくなってきました。五月の京都の葵祭ならば、葵の葉をかざしながら祭りを行っています。一昨日、私が登ってきた白山には「ひかげのかつら」が沢山ありました。「ひかげのかつら」というのは、青々とした苔みたいな草なのですが、京都や奈良のお祭では冠のところに巻き付けて、垂らしているのをよく見るでしょう。大分道端で踏まれていましたが、「ひかげのかつら」が随分あるな、と思いながら歩いていました。そういった自然との関わりを持つ雰囲気、この頃少なくなってきたように思います。花を祭りの時に使う方法は、地下の資料館で展示している神饌の花などを見て頂くとよくわかるかと思えます。

この頃は、あまり行くことができていませんが、私は世界中を旅行するのが大好きです。そこで、世界各地を眺めていると、バリ島へ行っても、沢山のお供え物がありました。しかし、日本の神様ほど食べ物にこだわっている神様はいません。日本の祭りの中では、食べるものを非常に大事にしています。日本の神様は人間に近い神様で、人間が喜ぶ事を喜ぶ。例えば、春日や賀茂の祭では揚げ菓子が出てきます。多分、始めた当時からするとハイカラな食べ物だったと思います。現在の神社では、洋風のケーキなどは神饌に上げないけれど、しかし考えによつては自分達が美味しいと思うものは、多分神様も喜ぶ、という風に考えていたのだらうと思います。日本の神祭りには、神様を喜ばせる、神様に喜んでもらう、そうすれば神様が言う事を聞いてくれる、何とかしてくれる、という考え方があります。神様は、人間に近い存在だということも含めて、祭りについて考えていかなければなりません。そんな研究の成果については、この十一月に『まつりのそなえ―御食たてまつるもの―』と題し、先史時代から現代までの神饌・幣帛について資料館で特

別展を開催しますので、是非改めてご覧頂きたいと思います。

事業選定を頂いて二年半。当初はこの建物もできておらず、実質的な期間はそのほど長くはないのですが、一定の研究成果を更に二年少々の間に形作りたいと考えています。まだまだ足りない面はあるけれど、しかし一生懸命で努力している点を見て頂いて、そして応援して頂きながら、新しい方法論や、研究成果、研究体制を作り出していきたいと思っていますので、どうぞ忌憚の無い御意見を、お聞かせ頂ければありがたいと思います。

本講演は、平成二十一（二〇〇九）年七月二十五日に、当センター中間成果公開シンポジウム「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」の基調講演として、國學院大學渋谷校舎AMC棟一階の常磐松ホールにて発表されたものである。当日は、ほかに各研究プロジェクトの成果発表があり、時務立正大学文学部准教授と、西岡和彦本学神道文化学部准教授よりコメントを頂いた。（記録 楠 恵美子）